

# 実況中継「土曜講座」

第14号

2023年3月31日発行

市川学園1月28日の土曜講座 於 多目的ホール

笹原宏之先生

研究が解き明かす日本語と漢字の不思議

早稲田大学 社会科学総合学術院教授



## 笹原宏之先生のご紹介

1965年 東京都生まれ

1988年 早稲田大学文学部卒業

1993年 早稲田大学文学研究科博士後期課程単位取得退学

1997年 国立国語研究所研究員

2005年 博士(文学)取得 早稲田大学社会学部助教授

2007年 早稲田大学社会科学総合学術院教授(現職)

経済産業省のJIS漢字、法務省の人名用漢字、文部科学省の常用漢字の選定・改定等、国の漢字関係の仕事にも多く携わる。

## 主な講義内容の紹介

漢字研究の第一人者である笹原先生の講座は、ご専門の漢字の話に留まらず、日本語の発音、語句の意味、文法など多岐にわたり、「日本語学全般の入門講座」といった雰囲気のものになりました。

「正しい日本語や美しい日本語ではなく、現実で用いられている日本語そのものを知る時間にしたい」という言葉で始まった今回の講座は、普段何気なく使っている日本語には、考えてみると不思議な点が数多く存在することを教えてくれました。一般の人とギターが身近な人では、「ギター」の発音が異なるということ、これまでは単に「授業」と呼ばれてきたものが、コロナ後は「対面授業」と呼ばれるようになったのは、「携帯電話」の登場で、これまで単に「電話」と呼ばれていたものが「固定電話」と呼ばれるようになったことと同様の現象であるなど、身近に潜む言葉の不思議な点に、受講していた生徒たちは強い関心を示していました。

最後に先生は、言葉や文字が多様であることの意義について説明されました。言葉や文字が多様であることには、微妙なニュアンスの違いを表現できることと、言葉の変化を生み出せることという2つの利点があるということです。その点を踏まえ、場に応じた最適な表現ができる力を身につけることの重要性を説かれました。

## 受講レポートから

- 漢字というのは人の判断で様々な形に変わり、辞書や常用漢字が絶対に正しいとは限らないことが分かりました。文字からイメージが生み出され、言葉が変わっていくというのはとても面白いと思いました。ニュアンスやアクセントによって全然ちがう言葉になったりするのはとても興味深く、日本語ならではの感じられたので、日本語が近い存在のように感じられました。「多様性」ということは、日本語がよく表してくれていると感じました。国際的な言語も大事ではあるものの、日本語も大事にしていきたいと思いました。漢字というものは、その一言以上面白い意味や奥深いことがあるとわかりました。漢字をもっと知りたいと思ったきっかけになりました。(中1女子)
- すごく面白くて楽しい講座でした。特に新明解辞書のお話と、おじやる丸の話がおもしろかったです。黒板に文字をたくさん書いて、みんなで考えたり、友達と喋ったりして、ただの講義ではなく参加型だったので、たくさんの具体例があって、日本語って例外や変化が多い言語なんだな、と感じました。辞書作りにならずさわっていた、という話を聞いて、すごく辞書が身近に思えました。「正しい日本語」よりも「現在の日本語」の方がなぜ大事なのかにすごく納得しました。幽霊文字や画数の多い名字がひとり歩きする、など漢字はまちがえやすいからこそ起きたことなんだなと思いました。ことばが時代で変わったり、地域で変わったり、国で変わったりするのがとても面白く感じました。漢字は今も変化していて、それによって存続している、というのが心に残りました。(中2女子)
- 細かいエピソードがたくさん聞けて、とてもおもしろかった。忘れてなくてついいたくさん書いてしまった。先生が漢字が好きなのがすごく伝わってきて、私もすごく楽しかった。いつも何気なく使っている日本語だけど、イントネーションの違いや書き方の違い、年月による変化など、すごく興味深かったです。辞書を作ることにはお堅いイメージがあったけど、研究者の方々が楽しんで作っていることがわかり、うれしくなりました。(中3女子)
- 今回は少し苦手な分野である日本語学について勉強した。自学や独学ではなかなかかからないと感じたので、面白く楽しく学べそうなこの講座を選んだ。専門の方の知識とユーモアの混じったトークはとても分かりやすく、理解が深まった。本日学んだことを色々な人に話して、よりきちんと理解して、さらなる興味を追求したい。苦手な国語を好きにしてくれた講座だった。とても価値がある貴重なものでした。(高1男子)
- 身近でありながら深いテーマでとても面白かった。発音の地域ごとの差異を科学的・論理的に解明する過程が面白く、興味がひかれた。西日本と東日本の発音の違いは関西弁と標準語の違いだと思っていたが、それ以外にも意識しなければ気づくことのない微妙な違いがたくさんあり、分析することの面白さを感じた。語彙では、翻訳可能性の話が面白かった。その言語にはない概念を翻訳するのは、特にタイトルなど字数に一定の制限がある場合は、もとのニュアンスを伝えるのはほぼ不可能だと思った。日本語と漢字から読み解く日本語学は、日本人だからこそ持ち合わせる感性に結びついていくように感じ、とても面白かった。何となく理系的な知が社会や学校で強調されているように感じていたが、文系的な知にも大きな意義を感じた。本当に有意義な90分だった。(高2女子)



(文責：南 信彦 先生)